

日羅の研究

—「宇佐大神氏進出説」批判(3)—

松
岡
実

- 一 はじめに
- 二 正史に現われた百済の政治家・日羅
- 三 日羅のふるさと・葦北百済米村
- 四 聖徳太子の師、日羅
- 五 文献・史料からみた日羅伝説
- 六 熊本、山鹿日輪寺とその周辺
- 七 大分の久多良木氏
- 八 まとめ
- 一 はじめに

渡辺澄夫氏は、さきに著書『源平の雄・緒方三郎惟栄』において中野幡能氏の宇佐大神氏進出説の疑問点の一つとして、日羅・蓮城の造立と伝えられる県中・南部の寺院や石仏文化等も、宇佐と六郷満山文化（仁聞）との対抗関係だけでその

成立を説明しなくてもよいのではなからうか。(同書四四P)

と書かれている。今回はこの疑問に答えるため、日羅信仰(伝説)を解明して、「日羅」と「仁聞」の信仰(伝説)は全く異質の成立であることを証明し、中野説批判の決め手の一つとしたのである。その要旨は、仁聞伝説は、国東・宇佐等ごく一部の地方的な小範囲のものであるが、一方、日羅伝説は、古く大和地方に起り、京畿から中・南九州の肥後・薩摩・日向・豊後にわたる壮大なスケールのものであり、宇佐大神氏とは何のかかわりもないものである。つまり中野氏のいう仁聞との対抗上生れたものなどでなく、大和地方の強い影響下に成立したものであることを解明してゆきたい。

二 正史に現われた百済の政治家・日羅

日羅が正史に現われたのは『日本書紀・敏達天皇記』である。つまり巻之二十、敏達天皇十二年秋七月丁酉朔の条に、相当の字数を費し日羅の事蹟が詳述してある。その大要が吉備氏族刑部氏系譜『日羅公伝所載』(日羅公伝については次章で詳述)に和訳してあるので次に掲げる。

「宣化天皇二年冬十月壬辰朔、新羅の任那に寇ふを以って、大伴金村大連に詔して、其子磐と狭手彦とを遣して、以って任那を助けしめ給ふ。是の時磐筑紫に留まり其の国政を執りて以って三韓に備ふ。狭手彦往きて任那を鎮め、加た百済を救ふ。火葦北国造阿利斯登子達率日羅、則ち狭手彦に従いて韓地に渡り、後、百済に在りて達率品と為る。敏達天皇、十二年秋七月朔、任那復興問題に就きて、日羅御召還の詔勅を渙発し、紀国造押勝と吉備海部直羽島とを百済に遣はさせ給ふ。冬十月、紀国造押勝等百済より還へり、百済国主、日羅を奉惜みて肯聴し上らざる旨復命す。是の歳、復た吉備海部直羽島を遣して、日羅を百済に召させられ給ふ。因りて百済王、思率・徳爾・余怒・哥奴知・参官・柁師・徳率・次干徳・水手等若干を附して奉遣す。日羅等、吉備児島屯倉に行到る。朝廷、大伴糠手子連を遣はして慰勞せしめ、復た大夫等を難波館に遣はして、日羅を訪はしめ給ふ。是の時、日羅、甲を被り、馬に乗りて、天機を奉伺し、其の甲を解きて天皇に奉る。乃ち館

を阿斗桑市に営りて、日羅を往らしめて、供給隨欲給ふ。復た阿倍目臣・物部鷲子連・大伴糠手子連を遣して、国政を日羅に問はしめ給ふ。十二月晦、百羅の徳爾・余怒等、日羅の身光の失ふを候ひて殺す。天皇、鷲子大連・糠手子連に詔して、小郡の西畔の丘の前現大阪市北区北同心町に收葬せしめ、其の妻子水手等を以つて石川に居らしめ給ふ。是に大伴糠手子連議りて、妻子を以つて石川百濟村に居らしめ、水手等を石川大伴村に居らしめ、凶徒を收縛して、下百濟河田村に置く。天皇、使を葦北に遣わし、悉に日羅の眷族を召して、徳爾等を賜ひて、任情決罪せしめ給ふ。是の時葦北君等、受けて鱈を報じて、彌賣島に投て、日羅を葦北に移して葬る。十三年『日本書紀』

となつており、さらに続けて
 「日羅の薨去後、聖徳太子、其の献策によりて、冠位を行い、また十七ヶ條の憲法を肇作せさせられ給ひ、また孝徳天皇の御宇には大化の改新となり、其の後、更らに近江令・大寶律令、及び國防の充実となる。又佛教の興隆は、日羅の献策の任那復興と密接な関係あり。(公伝)」

と記されている。
 とところで、この日羅が前述のようにその後の日本の政治に大きな変革をもたらし、また、日羅自身がその献策のため同行の百濟の役人のため暗殺されるような重大な献策とはどのようなものであったか。それを知るためには当時の日本及び九州の事情を知る必要がある。これは歴史学者でも無い私が述べるような問題ではないので前号とは重複するが、森田誠一著『熊本県の歴史』(山川出版社・県史シリーズ43)からその一節、五、六世紀ごろの火の国の状況の一部を拝借しよう。

「このころ大和政権は筑紫の君や火の君らの力を利用して朝鮮への勢力維持に懸命であった。磐井の反乱も日本と朝鮮との力関係の中でおこつた事件である。しかし南朝鮮での新羅の勢いは強大で、日本とむすんだ百濟を圧迫し、五六二年には倭人の多く住む任那を滅してしまつた。百濟も日本から離れようとする。五八三年、朝廷は百濟にあつて外交折衝をしていた日羅を事情聴取、対朝鮮政策打合せのため召還した。日羅は火のアシキタの国造、靱部阿利斯登の子で有能な人物であつた

が、帰国直後、同伴した百済の役人のため暗殺されてしまった。かの地を熟知しているかれの献策が、百済にとり不利にすることを恐れたからである。

玖磨川の南側、いまの八代市の一部から日奈久あたりまでが当時のアシキタ地方と考えられているから、日羅はやはり八代海運の支配者の一族であり、火の国の豪族が遠く百済にあって活躍していたことがわかるのである。しかもその父は国造であり靺鞨部である。靺鞨部は中央の大伴氏の配下にあった地方の軍事集団であるから、六世紀のころすでにこの地方の豪族は、大和政権の軍事組織下に編入されていたといえる。」

さて、このような事情の中でいわば送使という形でつけられた百済の監視人の中での日羅の献策は、「日本書紀」によれば「天皇所_レ以治天下政要須護_ニ養黎民_一何遽與_レ兵。翻將_ニ失滅_一。故今令_レ議者。仕_ニ奉朝列_一臣連_ニ二造_一。二造者_ニ国造_一伴造也。下及_ニ百姓_一。悉皆饒富。令_レ無所_レ乏。如_レ此三年。足_レ食足_レ兵。以_ニ悦使_レ民。不_レ憚_ニ水火_一。同恤_ニ国難_一。云々。」

とあるが、これを現代の歴史学者で最も日羅の功績をたたえ、その著『国民の歴史(3)飛鳥朝』(昭和四三年刊、文英堂)の中で、わざわざ「愛国者日羅のことばとその死」の一項を設けて詳述されている立命館大学教授北山茂夫氏の読み下し原文を掲げて理解して頂こう。

〔A〕 天皇の以て天下を治めたまうところの政は要_レ須_レくは黎民を護養いたまえ。何ぞにわか_ニに兵を興_レして、かえり失_レい滅_レしたまわん。

〔B〕 故、今議者をして、朝列に仕え奉る臣、連、二つの造より(二つの造は、国造・伴造なり)、下百姓にいたるまでに、悉にみな饒い富みて、乏めところなからしむべし。

〔C〕 かくすること三年にして、食を足し兵を足して、悦を以て民を使いたまえ。水火に憚らず、同じく国の難を恤えむ。

〔D〕 しかる後に、多く船舶を造りて、津ごとに列ね置きて、客人(朝鮮の諸国からの使臣、実際は百済の使者)に観しめ、恐_レり懼_レるることをなさしめん。

(E) しこらして乃ち、能き使を以て、百済に使用して、その国の王を召せ。もし来ずは、その太佐平（百済の最高位）、王子らを召して来さしむ。すなわちおのずから心を飲み伏うことをなさん。その後には罪（任那の復興を怠る百済王の罪）を問うべし。

また、別の機会に天皇に奉呈した上奏文のなかでも、

「百済人謀りて言わく、「船三百あり。筑紫に請らんと欲う」という。もしそれ実に請わば、陽賜予え。しからば、百済、新たに国を造らんと欲わば、必ずまず女人、小人を以て、船に載せて至らん。国家、この時に望みたまいて、尅伎、対馬に多く伏兵を置いて、至らんを候て殺したまえ。かえりてな詐かれたまいそ。つねに要害のところに、堅く壘塞を築かん。」

とあり、さらに北山茂夫氏は、「百済の政界にふかく身をひたしてきた日本人でないと見えそうもない見識」として、次のような解釈をされている。

「一 天皇の政治のあり方の基本点として、性急な大陸進攻政策を改め、民力を休養して執政者がまず臣と民を富ますべきである。

二 こうすれば、民飢えることなく、兵力も充足して、はじめて国難にあたる士気が生じ、本当の愛国心が生れるというもので、当時の執政者であった物部・大伴両連氏にとってたいへん耳の痛い発言であった。

三 次のでその後の百済にたいする外交的対決の仕方、さらに上奏文では、百済が筑紫にたいして何らかの領土的野心をあらわしたときの防衛の仕方について論じ、要害の地に城塞を築くことを強く要望しているのである。」

このように百済にとって不利な発言に終始した日羅の献策にたいして、日羅と同行した百済の参官恩率は、部下の徳爾に命じて大晦日の夜日羅を暗殺したのである。敏達天皇は日羅の死を嘆かれて、かれの妻子を保護し、暗殺手下人を父の葦北君らにゆだねられたが、葦北君はこれを殺して彌賣島（姫島）に捨てた。日羅は十三年詔により難波の小郡の西の畔丘の前（現大

阪市北区北同心町一丁目二十番地)に葬られたが、後、葦北に移葬したことが『日本書紀』に記されているのである。以上が正史にあらわれた百済の政治家としての日羅像だが、北山茂夫氏が前述の『国民の歴史、3飛鳥朝66P』で、次のように述べられているように、現在では歴史家の間にすら忘れ去られてはいるが、当時としては日羅の存在はきわめて大きなものであった。北山氏は日羅について、

「教科書はもとより、どの古代史でもまともに論じられたことのない、したがって大多数の読者にはまったく未知の人物であらうかとおもう。ところが、『書紀』は、百済にいた日羅の招致、かれの行動とことば、そして悲惨な最期などについて、たいへん詳しく、しかも力をこめて書いている。誰がこれを伝承し記録したかは、いまのわたくしにはかいかもくわからない。また、いまの『書紀』の巻二十、「敏達紀」の筆者は、古句麗使のことども書き綴ったとほとんど同様の筆致で、日羅とそれをめぐる周辺の諸事情を描きあげている。きわめて重要な史実を核心とするすぐれて説話風な記述で、その滋味は深い。かねてからのわたくしの愛読する文章のひとつである。」

と書かれ、日羅が、日羅以後の日本の政治に大きな影響を与えたことを示唆されているのである。

日羅の死後二年(五八五年)にして政權は敏達天皇から蘇我大臣系の用明天皇へと移る。さらに五八八年には善信尼の百済留学、法興寺の造宮が着手され、五九三年には聖徳太子の立太子と大和の政界は大きく変貌してゆく。この間僅に十年で、実に日羅の帰朝とその提言が、その後の仏教興隆、内政大変革という動きの起爆剤の一つとなったことは否めない事実であろう。敏達天皇十二年という年は政治家、軍人としての日羅の死の年であったが、その後八世紀以後は僧として蘇生する。大和地方では聖徳太子説話の中に生き、数多くの仏像を残し、一方では愛宕將軍地蔵にまで変身する。そして九州地方では、敏達天皇十二年という年号と共に、百済の僧、あるいは肥後の僧として、肥後、薩摩、豊後、日向の広い地域の信仰、伝説の中で現在にまで生き続けるのである。

私をはじめて久多良木の名を知ったのは、「大宰管内志・肥後之五（八代郡）」○豊村の項である。その註釈の中に、「葦北郡に久多羅木（クタラクキ）と云処あり、是百済より来たれる人のすみし処と聞ゆ、「長瀬の説」には久多羅木は葦北国造日羅が事跡なりとあり。」

また、葦北郡の条にも

〔長瀬氏云〕日羅が事跡は葦北郡久多良木と云処にあり。」

とあつて、この久多良木を中心とした葦北地方の探訪は私の長い間の念願であつた。昭和五三年に八代市、五五年に水俣市と葦北地方、五八年春に日奈久と探訪したが、この時までは、まだ古代火の国と葦北の国の古墳や、史蹟調査が精一杯で、久多良木の里までは行きつかなかつたが、それでも久多良木の里は、旧熊本県葦北郡百済来村大字久多良木で、現在では八代郡坂本村に合併し、その字馬場という処には、難波から葦北に移葬された日羅の墓があることまでは確かめることができたのである。ところで前三回の探訪で知り得た古代火の国、とくに日羅前後の状況は主要次のような事実であつた。

- (1) 玖磨川下流南側宮原町付近を中心とし、氷川^{ひかわ}一帯、つまり下益城郡から八代平野にかけての^{ひのむら}一帯が、古代火邑（火の国）発祥地で肥後型裝飾古墳群が分布している。
- (2) 玖磨川南側から日奈久あたりで、さらに不知火海を渡つた対岸の天草の一部の地方が特異の裝飾古墳地域となつておりこれが古代葦北の国と推定される。
- (3) 火の国の北、上益城郡から宇土半島一帯になるともう筑後型裝飾古墳地帯だが、火邑にはじまる肥ノ国が次第に發展して、八世紀前半までに下益城郡城南町、さらに北上して熊本国府（託麻郡出水、飽田郡二本木）に中心が移っている
- (4) 古代ヒノクニ、アシキタの国を基調とした肥の国はこのような道程を辿つて大きく發展し、平安初期には遂に上国から

九州唯一の大国へと成長したのである。

以上、私が各古墳や古代遺跡を訪ね実際にこの目で確かめ得たことは、このあとに述べる日羅研究の基本となるもので、この三回の古代火の国、葦北の国の調査は大変有意義なものであった。

次いで昭和五八年八月、夏期休暇中の息子松岡謙一郎の協力を得て、私は初めて永年夢に見てきた日羅のふるさと八代郡坂本村久多良木（旧百済来村）を訪ねた。

竹田市を経て、宮砥地区を通り、高原の村津留（熊本県）、祖母山の登山口五ヶ所に這入ればもう宮崎県だ。阿蘇の外輪高原から一気に高千穂の谷に下る崩野峠は今も昔も難所中の難所である。ここばかりは何時通っても道路の改修工事が行なわれており、下から仰ぐと丁度屏風（びょうぶ）を立てたような断崖に道がつけられ、それに熊がするどい爪でひきかいたような崩壊の跡がみえる。高千穂の町は、さすが夏休み中とあって若い人達でさわめいていた。

この神話のふるさとらしい風趣は秘境ブームの去った今も多くの若者を魅きつけているようだ。昔エイエイとルツクサツクをかついで越えた津花峠は、アツという間にトンネルで通りぬけ、そば焼酎雲海醸造元の近代建築に驚きながら五ヶ瀬町を通りぬけると、もう熊本県にはいる。蘇陽町馬見原は、高千穂・高森・松橋・椎葉をつなぐ九州中部きつての交通の要衝の地だが、現在も国道二六五号線が国見峠經由で椎葉村と結んでいる。かつては鞍岡―本屋敷―波婦―向坂山―霧立越―秘境椎葉へと、奈須大八郎や平家の公達の辿った歴史の道の拠点である。この町だけは、わざわざ国道からはずれて街道の町筋を通り、登山三昧に明けくれた若い頃の想い出話を息子に語り伝えた。椎葉への旅、大国見岳など九州山脈への登山のさい、泊った宿もまだ健在のようである。古代火の国と豊後を結んだ頃も同じただずまいであつたらうか。続く清和村や、戦国の動乱



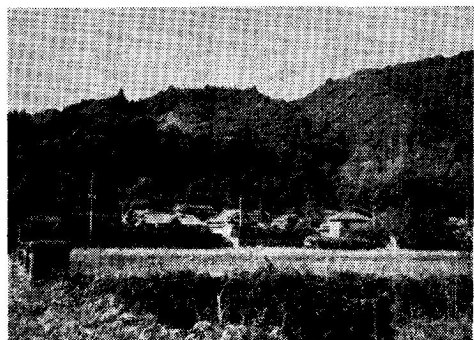
通潤橋 上益城郡那部町

期、阿蘇大宮司家の本拠であった矢部町あたりは、阿蘇外輪山と九州山脈の接する所で、緑川上流の河川が複雑に貫流し、通潤橋などアーチ橋の名橋が多い。車窓の左には向坂山（一五四二呎）、三方山（一五七八呎）、国見山（一七三九呎）、京丈山（一四七三呎）など九州山脈の名峯が次々と展開する。何れも私にとっては曾遊の山々である。外輪山を下りきった^{とち}抵用町も、二本杉峠經由五家荘の入口でなつかしい土地だが、今では奥地開発の波にのって国道四四五号線が秘峽五家荘、五木から人吉まで通じ、どんどん改修が進んでいる。熊本、宮崎両県は過疎地対策のため、こうした大規模な奥地開発事業が進み、人口流出防止・産業開発、いわゆる治山治水という地味だが百年の大計に立った政治がだんだん実を結びつつあるが、横文字好みの大分県政と果して将来どのような差が生じるであろうか。これは後世の歴史家が評価するところだ。熊本県下益城郡の主邑、甲佐町^{こうさ}の手前、中央町から道を左にとり、名石工のふるさと八代郡種山村（現東陽町）に向う。途中の泉村は五家荘の属する村で、鹿兒島本線^{ありさ}有佐、宮原町經由の五家荘の入口である。火邑^{ひむら}（火の国）を潤した氷川^{ひかわ}の上流で、源流地帯が肥後の名刹・白山釈迦院だ。古代火の国の聖域の一つである。峠一つ向うの五家荘に思いを馳せながら、氷川の急流浴いの道を下ると目的の一つ八代郡東陽村種山に着く。種山から大通越を経て五木村への道が開けている。とにかくこの方面の開発ぶりは、奥地が未開発のため荒廢の一途を辿っているわれわれ大分県民にとって驚異である。

さて、旧八代郡種山村は名石工の里だ。熊本県最大の石橋矢部町の通潤橋は、安政二年、種山の宇市郎、



種山石工の由来



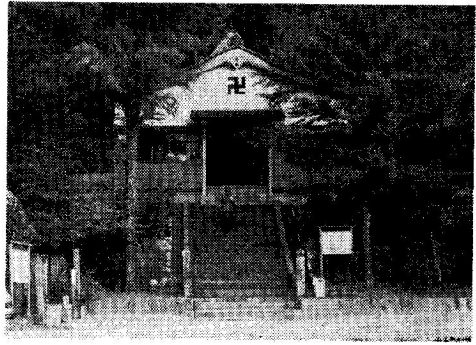
石工の里種山

丈八兄弟が逆サイホン（U字型連通管）の原理を応用して造った独創的な橋である。また、明治初期に東京の宮城二重橋・日本橋をはじめ各地で数々の名橋を残した橋本勘五郎一族や、岩永三五郎も種山の出身だし、大分県下の古い石橋のルーツを訪ねたら、必ずこの八代郡種山村石工の名が浮び上がるであろう。ここで橋本家をはじめ、石工の家を訪ねたが、殆んどが家の裏山が石切り場となっており、この地は石材の生産地でもあったようだ。なお、種山の石工集団については後の機会に詳しく述べる予定である。

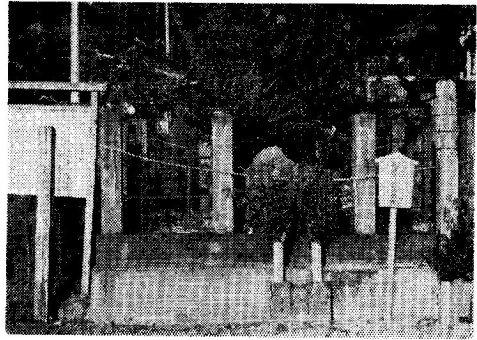
東陽町から国道三号線へ、さらに八代市から二一九号線をとって人吉への国道を玖磨川を遡ると、八代郡坂本村の入口の今泉地区につく。ここは古代から近世にまで生き続け、肥後刀の原材料供給地として有名な「今泉製鉄遺跡」のある所である。砂鉄は玖磨川流域だけでなく、遠く鹿児島県長島あたりから運んだという大規模な製鉄遺跡といわれる。この今泉から少し上流の破木地区に合流するのが久多良木川で、その上流一帯が旧百済来村である。

百済来は、鶴喰谷と久多良木谷の二谷からなっており、北に八竜山（五〇〇呎）、西南には路木山（三二五呎）、西に櫛山（三〇〇呎）の日奈久断層崖がそそり立つ。芦北の海岸へは、ただ一筋二見川沿いの道を通じ、古代芦北国の海岸側から見れば、急峻な山々の裏側にひっそりとかくれた隠れ里だ。役場、農協の支所はいずれも百済来支所の看板を掲げ、郵便局も百済来郵便局である。古い家々や神社、庵寺は高い石垣の上に黒い塗料で塗られており、異境の感じだが、一般的には豊かな秘境というふんいきである。久多良木地区はこの谷では比較的広くまとまったところで、学校などもあるが、その中心の字馬場という小高い丘上に日羅の墓地と、日羅が父阿利斯登のため百羅から贈ったという延命地藏堂がある。また久多良木の奥は、鳥越峠でその南麓には「銅山」という地区がある。このように久多良木地区は、古くからの製鉄遺跡と、銅山の中間地にある。

ところで、この久多良木地藏堂と墓地については、地藏堂横の郷土史家馬場継治氏が詳しいと言っているので早速馬場氏宅を尋ねた。馬場氏は幸い在宅中で心地良く迎えられた。というのは、久多良木姓は熊本県には殆んど無く、福岡県の筑後地方や、大分県から先祖のルーツを尋ねて、さいきん訪ずれる人が多くなり、別府からという私に歓迎の意を表されたらしい。話を聞く



百済来地蔵堂



日羅墓



久多良木風景

本書紀』をなお詳しく芦北地方の当時の事情を加えてその偉大さを語られ、さらに地蔵堂の由緒に及んだ。

一 地蔵堂本尊は、敏達天皇元年日羅が百済の国より、父の芦北の国造刑部鞞部阿利斯登に贈ったものと伝えられ、延命地蔵と称し、御身丈五尺三寸（一、六尺）の木彫座像である。学者の監定によると平安初期の作という。

二 地蔵堂の建立は光仁天皇宝亀元年（七七〇年）檜前中納言政丸が国司として芦北の尼ヶ岳に館していたとき、日羅の美名を慕って日羅の後裔にあたる加津羅という者が百済来に居住していたのを尋ねあて百済来の采地を与え、日羅の墓の上に堂を建立して加津羅の家に伝っていた仏像を安置して墓標としたのが創りである。

三 応永、長祿の頃から、龍吟山雲泉禪寺と唱え、鎌倉建長寺の末寺となった。

四 昭和十四年、百済来地蔵堂熊本県史蹟指定。

うち、馬場氏はその全生涯を日羅の墓守りに徹した人らしく、自費でプリンント刷乍ら日羅研究の小冊子を作っておられ、それに基づいて説明された。馬場氏の話によると、日羅の事蹟は前述の『日

となっており、境内に日羅公墓、大椿、大杉（天然記念物）、五輪塔群その他数々の遺跡があり、案内された。

次に訪ずれたのが、昭和五八年十二月未だが、このときは主として日羅創設の寺々の調査で、山鹿市の日輪寺をはじめ、合志、上下益城、八代郡下の寺々を訪ね、百済来の属する坂本村教育委員会で今泉製鉄遺跡の調査のとき、耳よりの話を聞いたのである。教育委員会の話では、私が必死になって探していた『日羅公伝』が、久多良木地藏堂に未だ残部があつて希望者に頒っている筈だというのである。私は再度、久多良木の馬場氏を訪ね教育委員会で聞いた話をしたところ、馬場氏は「今のところ未だ数冊残っております」という。「頒価は」と聞くと「一冊二千円です」という返事だ。昭和十一年の発行で、三三六頁、古本屋では一万五千円で取引きされ、それも私が東京、大阪等の古本屋に頼んでも入手出来なかつた稀覯本が思わず手に入ったのだ。馬場さんは「頒価二千円を頂くのが恐縮です」と言いながら、地藏堂参拝記念のタオルや絵葉書を添えて出されたが、これにはこちらの方が恐縮した。『日羅公伝』はさきほども述べたように昭和十一年刊で、矢野盛経氏著、発行所は、熊本県芦北郡百済来村役場内、日羅公遺徳顕彰会、定価は当時の金で参円五拾銭となっている。以下この『日羅公伝』から引用する文章は全て「公伝」と略記するのでお許しありたい。

さて、日本書紀によれば、日羅が敏達天皇十二年十二月晦日暗殺され、「小郡西畔丘前」にいったん葬られたが、「日羅移ニ葬於葦北、於レ後海畔者言」とあり、移葬はおそらく一、二年後と思われる。日羅の死が五八三年、つまり六世紀の終りであるから、古墳時代後期にあたる。いやしくも芦北の国造の子であり、百済の高官であり、朝廷のため一命を犠牲にした日羅の墓であるから相当の古墳が造営された筈である。私は大嵐蔵古墳群や、田川内古墳群など古代芦北の勢力圏内の大規模古墳の中の一つが日羅のため造られたものと思えてならないのである。そうすると当然百済来村久多良木の日羅墳は後世に百済渡来人の定着地に、日羅の後裔として、日羅を祀った遺跡であろうと考えられるが、そのいきさつを語るのが久多良木地藏堂の由緒であろう。以上合計五回の探査で得たのかこの結論だが、これを実証するのが、この論稿『日羅の研究』の主旨である。それは、実在の政治家日羅が、百済の僧日羅として、カリスマ化してゆく道程を辿るわけだが、まず、聖徳太子の師、日羅とし

て伝説の中で再生する姿から見てゆきたい。

四 聖徳太子の師・日羅

聖徳太子の生年には諸説があるが、上宮聖徳法王帝説によれば、甲午年とあるから五七四年がほぼ定説となっている。すると日羅の帰朝、暗殺の年の敏達天皇十二年（五八三年）は十才であるから、直接教えを乞う事はまず無いと思われるにもかかわらず、後の聖徳太子説話の中では、日羅が聖徳太子の師として登場するのである。その代表的説話は

百済の將軍日羅の来朝を聞いた太子は、馬飼いの子に姿をかえ、出迎への群衆に交って日羅を迎えたが、その時日羅は白馬にまたがり、黄金の甲冑を身につけ、威厳に満ちその威光はあたりを覆うばかりであった。後、太子は父王（後の用明天皇）に乞うて日羅を尋ねたが、日羅は身体から身光を發し、太子は白毫びくごうから光を放つ中で、日羅は淳々と豪族間の争いをやめ、富国強兵、内政整備の必要性を説いたが、その基本となるは仏教の興隆である事を強調した。太子は日羅の教えに感銘し、生涯をかけてこの教えの実行を誓われた。

というものであるが、さらに發展して、日羅は暗殺後、武神となって、京都朝日山（愛宕山）に飛び、帰朝の時の姿そのままに、愛宕將軍地蔵となり、日本の国土を護ったという。矢野盛経氏はさきの『日羅公伝』の中で、このいきさつを数十にのぼる資料をあげて説明されているが、これは全て後に仏教者が仏教説話として唱導したもので『日本書記』の、

於是日羅、自桑市村遷難波館。德爾等昼夜相計將欲殺。時日羅身光有如火焰。由是德爾等恐而不殺。遂於二十二月晦、候失光殺。日羅更蘇生曰。云々

を身光説の原典としているという。要するに仏教者の言いたいのは、聖徳太子は仏教の父であり、日羅は太子に仏教興隆を教えた師であるという事である。こうして日羅は八世紀ごろには百済の僧として再生した。なお日羅公伝に引用された文献の主なもの、『扶桑略記』、『元亨釈書』、『本朝高僧伝』、『聖徳太子伝暦』、『肥後国志』、『聖徳太子伝暦備考』、『中

河内郡誌』、『上宮太子實録』、『聖德太子實録』、『聖德太子伝図会』等数多いが、日羅の肩書きが百済將軍、百済神人、百済賢人、百済の僧、百済上人等に変化しており、政治家、武人としての日羅から後世になるに従い、百済の僧に変わって行くさまかうかがえて興味深い。ここにそれを再引用したいが紙数の関係で詳略させて頂く。

また愛宕神社については矢野氏は現地を調査し、廃仏棄釈前の古文獻、諸資料をもとに、文武天皇御宇に、朝日峰即現愛宕に神廟を建てて、鎮国家の神とせられたもので、文獻には、『愛宕神は日羅の靈也』（京師巡覽集卷之三十一）、『愛宕神は聖德太子之師日羅也』（本朝神社考）、『世伝現將軍地蔵又愛宕神、即日羅ケ靈也』（肥後国誌）

など数多くの事例をあげておられるか、この愛宕信仰と日羅創建の寺院については後にふれるので、ここでは甲冑の武神が乗馬する勝軍地蔵の原型が、日羅であることを記憶に留めておいて頂きたいのである。

五 文献・史料からみた日羅伝説

まず、私の調べ得た限りの日羅伝説を次に順記してみる。

近畿地方

○橘寺

奈良県高市郡明日香村橘

『国民の歴史』・飛鳥朝』北山茂夫著及び『公伝』口絵写真、国宝、木像乾漆日羅像（地蔵形僧像、伝弘仁期作）

○棕樹山勝軍寺

大阪府八尾市太子堂

『公伝』寺伝推古天皇二年二月、聖德太子伝法流布根元の靈場として建立、寺内に上宮院・清涼院・日羅院等院房あり。本尊如意輪観音、百済国王が聖德太子に献じた尊像と伝う。

○法隆寺

奈良県生駒郡斑鳩町

「公伝」僧形日羅絵像

○劍尾山

大阪府

『本朝高僧伝』日羅 後に撰の劍尾山を開く。織くならずして新羅人之を刺す。

○愛宕將軍地蔵

京都府愛宕神社

『本朝神社考・四一』公伝所載、愛宕山、世伝愛宕山神者日羅之靈也。(中略)次、乃_二愛宕山権現事、幕下告白、此神者、聖徳太子之師日羅也。後又有_二勝軍地蔵法_一。『本朝通鑑・附録一九』公伝所載、愛宕山、伝称、百済国日羅之靈也。又云天狗太郎房住_三此山_二云云。『京童・六五』公伝所載、愛宕山朝日の峰、勝軍地蔵と申すは、百済国日羅の靈なり。

以下十数例あるが、以上で愛宕將軍地蔵と日羅の關係をご認証ありたい。

○放光寺

大和国葛下郡王子村片岡山

『古事類苑・宗教部三』放光寺古今縁起、(前略)小懇田宮御宇九年十月梅日、調_二供養席_一、聖徳太子白作_二会式_一、導師惠慈、鶴勒再談、対講日羅、鶯子重来、梵唄讚嘆、(後略)

熊本県

○飯田山常楽寺

熊本県上益城郡益城町

「鎮西肥州益城郡飯田山常楽寺観音堂再興幹縁文」公伝所載、密以飯田山常楽寺。百済国日羅上人挿草之地也。往季披_レ榛夷_レ岳創_ニ一叢寺_一。彼上人者本朝 敏達帝十二年癸卯。浮_ニ星槎_一一渡_ニ滄溟_一。身放_ニ光明_一。神異不測也。聖德太子幼年而徵服潜幸。云云。初上人凌_ニ巨瀾_一。有_下欲_レ創_ニ佛宇_一之志願_上。而九重石塔齋_ニ持船底_一。而相_ニ處此山_一則安_レ之。奇哉經_ニ千餘歲_一今檜_レ見_レ在。佛法最初靈区。至聖冥鑿伽藍。良有_レ以矣。

「肥後国上益城郡飯野村大字小池字飯田山常楽寺明細帳」公伝所載

天台宗総本山比叡山延暦寺末常楽寺

一 本尊 千手観音菩薩

一 由緒 人皇三十一代註敏達帝癸卯年、日羅上人百濟より渡来開基せられ、堂塔莊嚴、規模宏大。云云。

○観音寺南望山慈眼院

熊本県下益城郡

『肥後国志』下益城郡杉島手永の条。

台宗延暦寺末寺。百済国日羅太子ノ開基ト云。天正年中、大僧都法印豪雅中興也。往古ハ寄附ノ地モ有シト云。本尊如意輪観音ハ聖德太子ノ作。脇士毘沙門天、持国天ハ運慶作ト云。年貢地ナリ。(鹿児島本線河尻駅下車南鉄道線路左側、観音堂として残る)

○日輪寺

熊本県山鹿市、日輪興国禅寺医福山円通院

『肥後国志』山鹿郡山鹿手永の条・日輪寺縁起禪洞家河尻大慈寺末寺也。領三石八斗五升外二山方三町餘。或記云。醫福山觀學院云云。俗説ニ當寺ハ敏達天皇御宇、鏡常註仏家の稱する年号三年、百羅國日羅太士來朝ノ時、當國ニ七大伽藍ヲ建立スル其一ニテ、初メ小峰山日羅寺ト稱シ、法相宗也。云云。寺記曰、當寺ハ朱雀天慶三年、國司尾藤少郷藤原原註ニ曰ク、或隆房皇記ニ紀トアリ昭上人ノ為メニ、此國ニ七大伽藍建立ノ其一ニシテ、天台ノ教刹也。其後及ニ破壊ニ處ニ花園帝正和五年、菊池肥後守武時入道寂阿、寒巖三世天菴懷義ヲ講シ、禪刹ニ改メ、再興之。延元年中、後醍醐帝勅願所トシテ日輪與國禪寺ト號ス。

什物

一 日羅法師所信多門天

一 同將來ノ五結

一 同珠數

一 同衣 藤皮ヲ絲ニシテ織レルモノ。

○橋田寺日羅山一乘院

熊本県菊地郡合志町竹迫

『肥後国志』・合志郡竹迫手永の条「台宗比叡山正覚院末寺也。用明天皇ノ御宇ニ、百濟國ノ日羅大師開基ト云。本尊正觀音年貢外ノ地也。

(補) 山鹿郡千田村聖母八幡宮ノ条云。合志郡橋田村橋田寺ハ当社ノ社僧也。聖母宮ノ社僧千田莊橋田寺トアリ。

○常樂寺寿福山

熊本市龍田水源地下方

『肥後国志』・鮑田郡五町手永ノ条「熊本寺奉行支配之禪家妙心寺末寺也。當寺ハ初メ日羅ノ開基ト云伝へ、星霜久シク天文ノ比、豊後ノ志賀氏モ當寺ニ身潜セリ。其後浄土宗梵刹トナリ。寿徳山常樂寺ト号ス。日羅作仏ノ本尊觀音ノ像ノミ、纜ノ

艸堂ニ安スル。云云。(後ニ寿福山常楽寺ト改ム)

○龜峰山興禪寺

熊本県八代市興禪寺

『肥後国志』八代郡種山手永の条「抑モ当寺ハ、敏達天皇十二年、日羅上人開基ニテ、本尊千手観音菩薩ハ、聖徳太子ノ御作ニ而、身長五尺八寸九分、台共七尺ナル本尊勸請シ、自ラ毘沙門天ノ木像ヲ作ス。協立毘沙門天ノミ。毘沙門天ハ身長四尺七寸、台共五尺。日羅太子ノ御作ニ而、治承二年六月、高倉帝ノ御宇、天台宗トナル。云云。『護国山頭興禪寺之縁起』龜峰山興善寺述天台ノ教刹ニテ高倉帝治承二年、小松内府重盛領国ノ時、肥後守貞能代官トシテ、国中ニ七大伽藍建立ス。是其一也。一説日羅開基トモ云。不知_レ是非_一。

○華簇寺

熊本県玉名郡花群山

『肥後国志』玉名郡内田手水ノ条「禪洞家。欽明帝依_レ勅建立_ニ立之。初、日平山吉祥如意輪寺ト号シ、本尊多門天日羅一刀三礼ノ作ト云。根本中堂、及ヒ坊舎二十五坊、其産五十丈畝、光孝帝仁和二年ニ炎上、殿宇悉ク焼失、寺領ヲ諸所ニ掠メ取ラレ、朱雀帝天慶四年、皇昭上人再_ニ興之。天台宗也。且米野山、小峰山、梅ヶ谷、桜谷四刹ノ梵宇甚タ破壊シテ寺院較ネ残タルヲ再興ス。然後、菊地肥後守武重又再興シテ、山脇ノ田地十五丈畝ヲ寄進アリ。後小松帝応永十八年、山鹿郡杉村日輪寺三世ノ住僧雲峰安意和尚修營シテ、即禪刹トシ、花簇寺ト改称ス。

○百済来地藏堂(伝日羅墓地)

熊本県八代郡坂本村久多良木

『熊本県芦北郡百済来村久多木地藏堂文書』公伝、光仁天皇元年、檜前中納言政丸云云。日羅カ墓上ニ堂ヲ建ツ。加津羅羅_{ヒノクワ}ノ裔_{ヒノクワ}・日ガ家ニ伝ヘシ地藏菩薩ヲ安置シテ、墓印トス。今ノ地藏堂是也。

『書紀通証』公伝、今芦北郡有_ニ久多良木_一。舊名百済來。此葬_ニ日羅_一地也と云。

宮崎県

○石山観音寺

宮崎県北諸県郡高城町

『日本古寺事典』開基、伝日羅。開創年、伝天武天皇八年_一六七九。安産の守り神として有名。千三百年ほど前、勅命を受けた日羅上人が、霧島皇神のお告げにより子安観音を安置したことに初まる。高さ五畧の岩壁と馬のひづめ跡あり。

鹿児島県

○清泉寺（廃寺）

鹿児島市下福元町

『日本古寺事典』開基、日羅。応永年間に再建。県下最古の寺というが、いまは廃寺。磨崖仏（不動明王、菩薩像、金剛力士像を岩壁に浮彫りにしたもの）

○一乗院

鹿児島県川辺郡坊津町坊浦

『馬場継治文書』約一四二〇年前百済の僧日羅創建と伝う。

○慈眼寺

『馬場継治文書』推古天皇の朝、百済の名僧、日羅開基。

大分県

○大恩寺

大野郡朝地町板井迫

『豊後国志』大恩寺。在大野郷板井迫村、日羅開基。永祿中。志賀道翁宮焉。其墓在寺後。

「大恩寺縁起」敏達天皇之御宇、百濟沙門日羅來朝之節草創二而、大日如来本尊興仕、金海山大恩寺興号申候。日羅彫刻之鬼子母神二面、龍口四口于今傳來仕候。二云云。

○普光寺

大野郡朝地町

『豊後国志』普光寺。在大野郷上野村。敏達朝日羅所創云。

○阿西寺

大野郡緒方町軸丸

『豊後国志』阿西寺。在緒方郷軸丸村。敏達朝日羅所創。大野緒方中。岩屋寺。法乘寺。光巖寺。大禪寺。柏寺。今廢。

普光寺及此寺現存。以為三七処。皆有巖石刻ニ佛像。通言ニ日羅所造。按国史レ称日羅非僧。抛三元亨积書則如僧。恐別有僧日羅者。未レ詳。

喜田博士「炭焼長者譚」(『民族と歴史』第五卷第二号)緒方莊阿西寺不動堂は日羅の建立とぞ。日羅上人、敏達帝の朝に百濟より帰り、豊後大野郡に暫らく留錫せらる。或日一刻ばかりの間に郡内を廻り、靈所七所を擇み、石仏を置かる。一番大方筑紫生寺、二番に岩屋寺、三番法乘寺、四番光巖寺、五番大禪寺、六番阿西寺、七番柏寺なり。屏岩百尺、激湍清く漲り、佳景辞にもべがたし。神通妙用の手に依らずんば、如何で如し是を得んや。

○宮園の石仏

大野郡緒方町宮園

「公伝」大野郡南緒方村宮園の石仏も亦た日羅の作と伝える。

○菅尾の石仏

大野郡三重町菅尾

「公伝」大野郡菅尾村大字浅瀬字宇対瀬の岩権現にある石仏も日羅作と伝える。この岩権現石仏群の製作年代に就きて浜田博士は「我々は之を広隆寺講堂の諸像等と相似たる様式手法から見、又た之を他の平安朝時代の仏像と比較して、其の平安朝初葉乃至中葉の作品とする点に於て殆ど之を疑わない。

○内山蓮城寺

大野郡三重町内山

「豊後国志」蓮城寺。在三重郷内山村。敏達帝二年。百濟人釈蓮城創之。真名野長者所建也。

「臼杵石仏地域の民俗」66 P。元徳三年（一三三一年）内山寺号蓮城寺。「爰彼寺者、日羅上人建立往古之寺也。」

○東洞寺

竹田市北下木

「豊後国志」東洞寺。在岡城西北下木村。又曰不動院。古刹不知其創。相伝巖壁不動像。僧日羅所刻。云云。

○岩屋寺

大分市古国府

「豊後国志」岩屋寺。在笠和郷六坊。紀聞曰僧日羅者嘗經過于此。見翠崖崔巍。曰。靈場也。遂就其窟。自刻葉師二光仏。及十二神將像。以祈結字名岩屋寺。云云。

○九六位山円通寺

大分市宮河内

『豊後国志』円通寺。在丹生郷九六位山上。古刹。敏達帝季年。僧日羅所創。自刻觀音大士像。安三千此。後延曆寺僧俊覺法印創立十二坊。云云。

○満月寺

臼杵市深田

『豊後国志』満月寺。在臼杵莊深田村。善鳴録曰。真名野長者敏達朝人。深帰三宝。乃就于深田邑。創祇陀、療病、施薬、安養、快樂五院。名紫雲山満月寺。多造佛像。礼拝供養。今其境。石山之崖、悉刻仏像。所謂十三仏、二十五菩薩。二金剛。弥陀釈迦三尊等。大小百余軀儼在。其它石浮図五六在田間。

『臼杵小鑑』（鶴峰戊申）其のはじめ小倉山と号し、臼杵第一の大寺なり。天正年

中宗麟入道の破壊によって荒廢す。今存する物は古石仏の像及び鎮守山王の祠のみ。

相伝ふ満月寺は万能長者の建立にして、百済の日羅の開山とす。

以上を図表及び図示すれば別掲の通りである。

さて、日羅伝説を以上のように文献、資史料面から分拆してみると、大きく分類して、

① 聖徳太子説話の中に仏教興隆上の太子の師として登場。

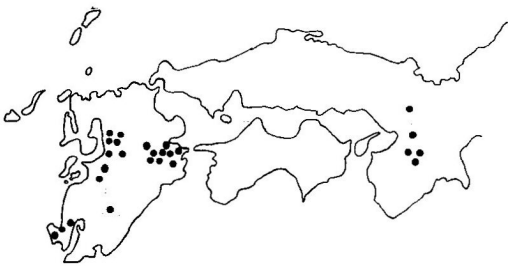
② 古代寺院の開基者。

③ 磨崖石仏の製作者。

の三つに大別される。そしてその活動年代も、「敏達天皇御宇」としながらも、

④ 奈良時代

⑤ 平安時代



日羅伝説分布図

日羅伝説寺院一覽表

(磨崖石仏の推定製作年代は岩男順氏の報告によった。)

府県	郡市	名称	開基	年代	再興	年代	遺物	推定年代
奈良	明日香村	橘寺	聖徳太子				木像日羅像	弘仁
"	斑鳩町	法隆寺	"				僧形日羅絵像	
"	放光寺	放光寺	"				対講日羅	
大阪	八尾市	勝軍寺	"	推古二年			日羅院	
"	劍尾山	劍尾山	日羅				日羅の霊	
京都	京都市	愛宕山	日羅				日羅墓	
熊本	益城町	常楽寺	日羅	敏達十二年	豪雅	天正	日羅所持の多門天、五鈿珠数、藤衣	(平安)
"	下益城郡	慈眼院	"					
"	山鹿市	日輪寺	"	敏達	昭	天慶三年		
"	合志町	一乘院	"	用明		天文	伝日羅作観音	
"	熊本市	常楽寺	"				伝日羅作多門天	奈良
"	八代市	興禅寺	"				伝日羅作多門天	良
"	玉名郡	華簇寺	"	敏達十二年	重盛	治永二年		
"	坂本村	百濟来地藏堂	桧前中納言		昭	天慶四年	伝日羅墓所	
宮崎	高城町	石山観音寺	日羅	天武八年			子安観音、岩壁馬のひづめ跡	
鹿兒島	鹿兒島市	清泉寺	日羅	最古の寺		応永	磨崖石仏三体	

大分	坊津町	慈眼寺	日羅	敏達	志賀道翁	永祿	伝日羅作、鬼子母子神面・龍口四口	鎌倉初期
朝地町	大恩寺	普光寺	日羅	敏達	志賀道翁	永祿	磨崖石	鎌倉初期
緒方町	阿西寺	阿西寺	日羅	敏達	志賀道翁	永祿	七所磨崖石	平安室町
同時開基・筑紫生寺 岩屋寺、法乘寺、光 嚴寺、大禪寺、柏寺 計七ヶ寺	宮園石仏	菅生石仏	日羅	敏達	志賀道翁	永祿	磨崖石	平安安
三重町	内山蓮城寺	蓮城、日羅	敏達	敏達	志賀道翁	永祿	磨崖石	平安安
竹田市	東洞寺	日羅	敏達	敏達	志賀道翁	永祿	磨崖石	平安安
大分市	岩屋寺	日羅	敏達	敏達	志賀道翁	永祿	自作観音像	平安安
白杵市	満月寺	日羅	敏達	敏達	志賀道翁	永祿	磨崖石	平安中鎌倉

◎ 平安―鎌倉―室町の三時代に亘る。

の三種類の開基・造像・製作と大きく広がっている。ここにカリスマ的存在としての日羅の秘密がありそうである。

ところで、現在までの日羅観は、岩男順氏が「大野川」（大分大学刊）に大野川磨崖石仏建立の史的背景としてまとめられ

ている通り、

(イ) 日羅は僧でない。

(ロ) 日羅とは梵僧の片名であつて跋日羅(金剛)の頭字の「跋」を省いたもので、もともとは渡来僧の××日羅という僧が日本書紀中の日羅と混同して同一人の如く伝えられたものであろう。(小野玄妙博士説)

(ハ) 書紀の日羅は飛鳥時代のことであり、豊後地方磨崖仏の様式とは時代的差異があるので、日羅作の伝記を生かす必要を全く認めない。(浜田耕作博士説)

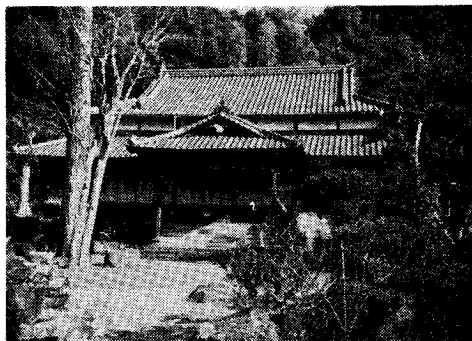
(ニ) 宇佐から進出した豊後大神氏が「仁聞菩薩」に対抗して「日羅律師」信仰を起した。(中野幡能博士説)

(ホ) 石仏の在る場所が山中の幽邃な処であることや、石仏造頭が正史に記されぬ私的、地方的、庶民的性格のものが多いで、それにまつわる奇譚、伝説中の人物。(谷口鉄雄氏説)

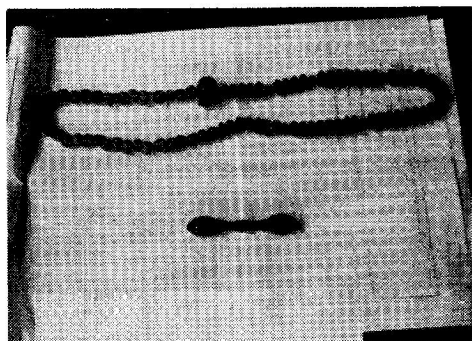
の五説を挙げ、日羅については、これ以上究明することは困難である、と結ばれている。私はこの五説のうち谷口説に共鳴する者だが、但しそれには次のような段階があることを強調したい。

その一は、まず日羅という實在の人物、それもさきに紹介した「愛宕者百済の將軍」としての存在である。その二は、八世紀になって聖徳太子説話の中に百済の僧、太子の師日羅として再生したこと。その三は、平安期に肥後の七古古代寺院に、再興者の手によって開基者として登場したこと。(おそらく天台宗で皇昭あたりが中心者と思われる。)さらに、その四は平安未及び鎌倉期に豊後、日向、薩摩の古代寺院や、磨崖石仏のカリスマ的造頭者として再登場した。その理由は谷口説が実に適切であり、また真相でもあろう。鎌倉期に肥後の日羅信仰(伝説)を豊後に引入れたのは、岩男氏の指摘(前掲・大野川)の通り、志賀氏と思われるが、これは本編の結語(まとめ)に譲りたい。

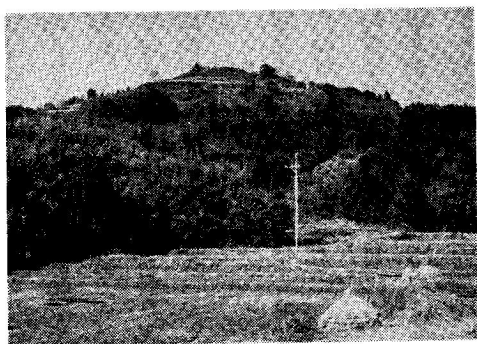
六 熊本県山鹿市・日輪寺とその周辺



日輪寺



日羅遺品



日輪山

(小峰山とも言い、山頂に菊鹿地方最古(4世紀)の古墳がある。)

日羅開基の伝説をもつ古代寺院の中で、現代まで連綿として栄えているのは、山鹿市の名刹日輪寺である。はじめ小峰山日羅寺といい、法相宗(奈良県法隆寺と同宗派)であったが、天慶三年、国司尾藤小郷藤原隆房が、皇昭上人のために肥後七大海藍建立の第一として再興、天台宗に属したという。次いで正和五年、菊地武時が寒巖三世天菴懷義を招いて禪刹となった。現在境内には、西国三三ヶ所の石体観音、菊地武時の息女素覚尼の五輪塔、芭蕉の句碑、大石良雄ら十七義士の遺髪塔があり、背後の日輪山山頂には、山鹿地方最古(四世紀)といわれる竜王山古墳がある。なおこの寺には日羅の遺品といわれる

一 日羅法師所信多門天

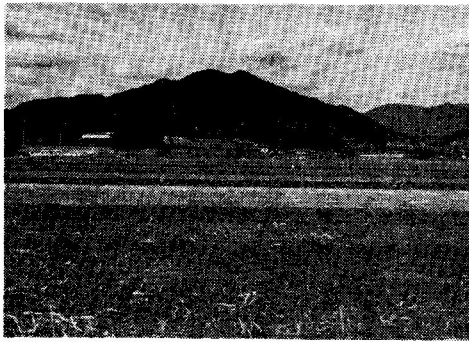
一 日羅将来の五針

一 同 珠数

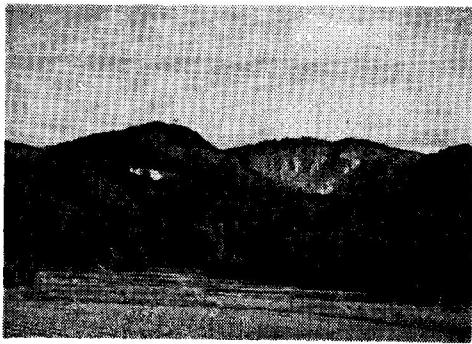
一同衣（藤皮を絲にして織ったものという）

が現存し、私も拝観したが、五站は時代的に新しいと感じたが、珠数は木玉と水昌玉の二つから成っており、木玉は別として、水昌玉は、明らかに彫刻をほどとした古代水昌であった。肥後の古刹には、竜峰山、亀峰山等、峰の字を冠した山名が多いが、これも古名が小峰山であり、小字も小峰となっていることから、その創建は少くとも、平安時代、あるいは奈良時代にまでさかのぼれるかも知れない。

ところで、この日輪寺から東へ約二^キ離れた所に鍛冶の神一ツ目神社があることに注目せねばならぬ。一ツ目神社にふれる前にまず日輪寺をめぐる周辺の環境を見ておきたい。菊鹿地方と呼ばれる山鹿盆地は、北方は筑後平野と境を接する筑肥山地。さらに東方は津江山系、西南方は玉名郡との境界である米野、国見の山々に限られている。そのほぼ中央にあたかも大和



震岳（ゆるぎ岳）



彦岳

三山のように並立するのが、彦岳（三五五^{だけ}）・震岳（四一六^{だけ}）・不動岩の三山である。そしてその中央の山、肥後小富士と別称される震岳の南西麓にあるのが、日輪寺と、一ツ目神社だ。ところがこの三山については次のような面白い伝説が伝わっている。

「彦岳と不動岩は兄弟であったが、彦岳は継子で、母が大豆ばかり食べさせ、不動岩は実子だったので小豆を食べさせて育てた。のちにこの兄弟の山が綱を首にかけて首びきをした時に、彦岳は大豆を食べていたので力が強く、小豆で養われた

不動岩は負けてしまつて、首をひき切られて久原というところに首が落ち、今でもそこに首岩という岩が立っている。揺ぎ岳という山は三山の真ん中に立っていて、首引きの綱にひっかかって揺いだから揺（震）岳、山中にふた筋のくぼんだ所があつて、そこだけ草木の生えないのは、綱でこすられたあとだという。また不動の首岩の近くでは、今でも血のため土の色が赤く、麓一带を血田と呼んでいる。」

なお、不動岩は岩松の群生する約六〇呎の礫岩の岩峰で、脚下に祀る宮地獄宮社地から平安後期久安元年在銘の経筒（県内最古という。）が発見されている。

実は、以上の伝説には非常に興味深い歴史の流れが示唆されている。その第一は同じ民族ではあるが継子と実子という二大勢力の勢力争いを思わせる。その二は赤い地、血田で連想させる鉄鉱資源の存在である。それを裏付けるのが鍛冶の神、一ツ目神社の存在である。一ツ目神社は、前述の首岩の西側山麓にあり、前に一ツ目の池、神社背後は、「世止めの池」と呼ばれる二つの池の中心部にあつて、この池の水が豊かである限り世が栄えるという言い伝えがあるという。その水源は断層崖状に連る背後の山にある湧泉地だが、土地の人の話では、この断層地形は東に延びて、首岩から不動岩まで数に及んでいるという。地形や地質の事については全く知識の無い私にはわからないが、断層地形の部分は、赤褐色の通称ダゴ石と呼ばれる丸形の小石が層をつつて累積しており、下層部で各所に湧泉がみられるそうである。一ツ目神社の湧水池に地元の人々の案内で行つたが、清冽な湧水が洞穴状の中からはとばして湧き出しており、洞内から流出井路に至るまで目にもあざやかな赤色の丸石が流下している。そして下方の耕地もまた粘土とは異なる特殊な色彩をおびた赤い耕土である。この耕地を見て私は阿蘇町乙姫の下山西遺跡北方の阿蘇黄土地帯を思い出した。阿蘇地方の古墳の特徴の一つに、石室や石棺などから大量にベンガラが出てくることあげられている。とくに下山西遺跡の石棺からは三基あわせて一一〇kgという大量のベンガラが出土している。実は最近の調査で、乙姫一帯の水田や原野に推定五〇〜一〇〇万トの阿蘇黄土（酸化第二鉄）が埋蔵しており、この阿蘇黄土を焼いて古代人がいとも簡単にベンガラを作つていたことがわかつた。これが阿蘇の豪族の外貨獲得の大きな資源であつたこ



一ツ目神社

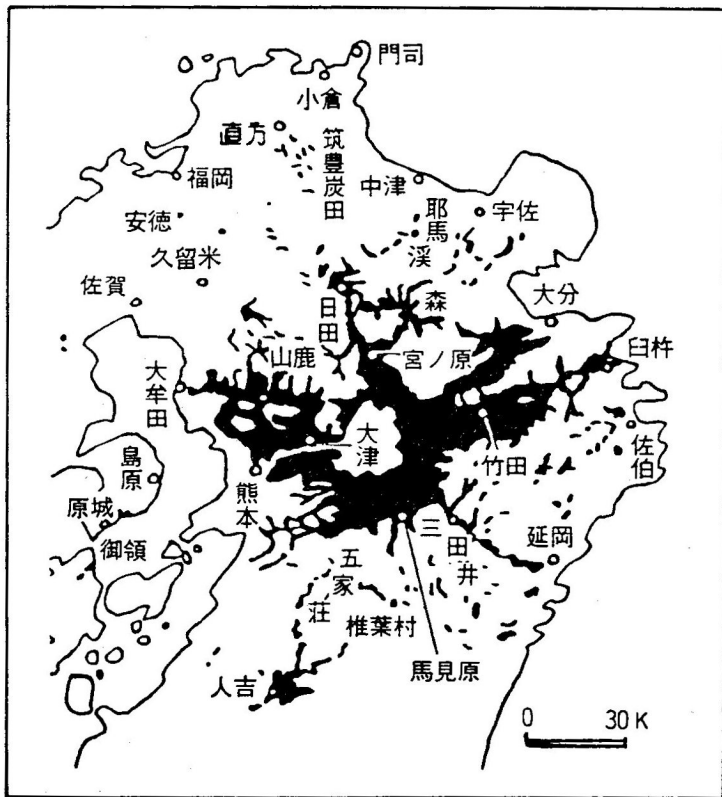


一ツ目神社水源池

か。不思議なことに、日羅のふるさと久多良木墓地の裏山一帯もまた粘土層とは異なる赤色土石の累積地帯であり、その下流数^キの所に今泉製鉄遺跡があり、山鹿地方と同じく阿蘇溶岩地域である。

さて、ここで一ツ目神社に言及したい。山鹿市の一ツ目神社は、熊本県神社誌によれば継体天皇四年(五一四年)の創建と伝え、天目一箇神が祭神となっている。天目一箇神は、天孫ニニギの命が高千穂の峰に降臨した時、伴ってきた様々の職能神の一つであるが、『日本書紀』には「天目一箇神ヲ金作者」と記し、目が一つしかない鍛冶の神としているが、主として東日本に広く分布し、民俗学上では、鍛冶師が鉄を造るには、砂鉄や鉄鉱石の原料を製鉄炉たたらに入れて高熱で溶解せねばならぬが、長年にわたって炉の火止穴ホドから中をのぞいて火加減を調節するため目をやられることが多く、一ツ目は製鉄業者の職業病の投影としている。また一ツ目神社の氏子は、眼の大きさが異るとか、さまざまな伝承があるが、これを説明するには多くの紙数

とも証明されてきている。この阿蘇黄土は、数万年
前、阿蘇の火口原は巨大な湖で溶岩中の鉄分が湖水
に溶解し、水酸化鉄となって分離沈殿したものだとい
われている。実は別掲の阿蘇火砕流堆積物分布図に
もあるように、山鹿市一帯は西の中心部である。阿蘇
黄土があつて当然であり、一ツ目一帯の皿田が山鹿
地方の装飾古墳の装飾色彩の原材料と何等かのかか
わりがあつたのではないだろうか。さらに菊地川流域
一帯の砂鉄は折れず曲らずと古来から持てはやされ
た胴田貫の名刀を生んでいるが、この数^キにわたる
赤褐色のダゴ石と何等かのかかわりはないであらう



阿蘇火砕流堆積物の分布図

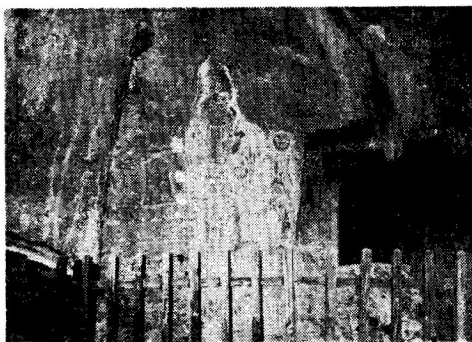
えとのす・22号・阿蘇の成り立ち (松本幡郎) より

を要するので省略したい。山鹿市の一ツ目神社付近は製鉄に必要な水量も豊富で、東北方にあたる津江山系から吹き下す自然風も、不動岩と震岳間の谷間の首岩付近を通りぬけ、古代製鉄地としてあらゆる条件を供えているのである。日羅創建と伝える日輪寺と、鍛冶の神一ツ目神社の存在、これは決して無縁のものでなく、熊本県下における久多良木姓が、荒尾市と菊鹿地方に限られるのは、百済系採鋳技術者の移動ともかわりがありそうである。

さて、日輪寺周辺の古代遺跡として今一つ忘れてならないのは、この地方独特の装飾古墳の存在だ。山鹿市立博物館発行の『山鹿の文化財』(原口長之氏著)によれば、全国二八〇数例の装飾古墳のうち、その四〇%にあたる一二三例を持つ熊本県の

装飾古墳を詳細に検討され、山鹿地方では彩色文化圏であった筑後型装飾古墳が、五二八年の警井の敗戦を境として、肥後型の浮彫りの彫刻技法にかわってくることを指摘されている。それを代表するのが、菊鹿川の支流岩野川にのぞむ阿蘇溶岩の岩面

に浮彫りとして彫刻された鍋田横穴群で、その白眉が第二七号羨門外壁の壁画である。時代は六世紀後半―七世紀に編年され、原口氏は盤井の敗戦後の火の君の勢力伸張を示唆されている。日羅召換の年が敏達十二年（五八三年）だから、ほぼ時期を等しくしているのである。原口氏はさらに菊鹿地方古墳群の最後を彩るものとして筑後型系統の巨石墳または横穴に自由画風の線刻を施した大分型グループの存在を設定され、南と東からの大和勢力の進入を主張されているのである。そしてその後が続くのが新しい仏教登場の時代である。火の国から肥の国に発展し、肥後南部から中部、北部にその勢力が伸長した道程の歴史的背景は、古墳時代に続く古代仏教全盛時代を衆徴する古代寺院群に見ることができ、その中で日羅創建と伝える七ヶ寺の古寺の役割については、「まとめ」で詳述するので、ここでは後代の磨崖石仏の原型ともいえるべき、肥後型彫刻タイプの装飾古墳一、二について今少し述べたい。



鍋田横穴古墳

肥後型浮彫り彫刻古墳の発生は六世紀後半の長岩横穴（一〇九号）に初まり、七世紀後半の鍋田横穴（二七号墳）に及んでいる。長岩横穴群は阿蘇熔岩の絶壁に一一八の横穴がつらなり、その中に浮彫りの壁画が六基ある。人物像は手をひろげ足を踏んぱり、威容を示して横穴の入口を守り、鞆・弓・剣など武器をもち、威力によって悪霊の侵入を防ごうとしているのである。なお、長岩横穴群の中には、きわめて小さい横穴があって、火葬との関連が考えられ、古墳時代から仏教儀礼への移行過程が学界で注目されているという。前掲の鍋田古墳は、阿蘇熔岩の崖面約三〇〇坪の間に六一基の横穴があって、うち十五基に弓、楯・鞆・人物・鳥・馬・三角形連続文・格子文などが浮彫りされ、古墳時代末期の七世紀に編年されている。私は二七号墳の前に立って、岩野川を挟みはるかに彦岳、震岳の円錐形の神奈備山を望んだとき、背後に立って足を踏んぱり、両手を広げた武神の浮彫り磨崖像が、大分県下の磨崖石仏の祖型に思えてならなか

った。このほか、城・付城・小原・大塚・小原浦田等各横穴古墳群は何れも阿蘇熔岩の絶壁に浮彫りされた壁画だそうだが、これらも引続き訪ずれてこの目で確かめたいと思っている。

さらに菊地川下流の玉名市石貫の石貫穴観音横穴の二号墳は、石屋形左右の屍床は舟べり型の美しい曲線の縁をもち、上部に此を刻み出すなど凝ったつくりを持つ古墳だが、穴の奥正面に軒丸瓦を表現した屋根をもつ石屋形があつて、その奥壁に、舟型光背を備えた千手観音像が、壁を一段彫り込んだ中に半肉彫りされている。この千手観音については、横穴が構築された七世紀の造像説と、平安以降の追刻とする二説があるが、何ずれにしても仏教の影響をうけた貴重な古墳として、国の史跡に指定されている。また古代の六反製鉄遺跡に近い城ヶ辻古墳からはベンガラを入れた壺が副葬器として出土しており、日輪寺と関連の深い日羅建立の古代寺院華族寺も指呼の間にある。

日輪寺をめぐる周辺の環境は、古代製鉄遺跡と共に、古墳時代末期を彩る浮彫り式石彫横穴古墳群の存在を忘れることは出来ない。そして北漸を続けた壮麗な火(肥)の国文化圏は、北九州古代文化圏には生まれ、菊鹿地方を終着点として、地形、地質を同じくする豊後大野川流域に東漸し、古代大野川文化のあけぼのが初まるのである。

七 大分の久多良木姓について

熊本県下には、さきに述べたように久多良木姓はきわめて少く、荒尾市と菊鹿地方県北地域にわずかに散在しているのみで、県中南部地方には皆無の状態だが、不思議なことにその主力は大分県下に移っていることを私は今回の調査で発見した。その分布状況は、

○大分市

久多良木 十戸

久多羅木 四戸

久多羅岐 一戸

○野津原町福宗

久多良木 七戸

○挾間町筒口

久多良木 二戸

○庄内町五ヶ瀬

久多良木 七戸

その他別府市、日田市、竹田市各一戸で、合計三十四戸にのぼっている。これを分類すると、大きく分けてその発祥は、

(1) 大分市鶴崎の久多羅木

(2) 野津原町福宗籠の台の久多良木

(3) 庄内町五ヶ瀬室小野の久多良木

の三地区に別れるようである。これはすでにお気付きのように旧肥後藩領に限られている。何れも先祖は熊本から来たという伝承をもっており、おそらく近世初めの移住と推定されるが、久多良木姓移住の経緯については後日別稿で発表したい。ただ野津原町福宗籠の台の久多良木一族に関する資料の一部を述べ、旧藩時代の役割りの一端を紹介しておきたい。

『大分県地名事典』によると、福宗村野々台に狼煙台が設けられ、参勤交代を終えて領主細川公の御座船が鶴崎港に入港すると、狼煙をあげることになっていた。江戸後期には石火矢（大砲）の空砲をうっていたという。野津原惣庄屋はこれを合図に人馬を鶴



大分久多良木の里野津原町福宗籠の台

崎に派遣し出迎えることになっていたが、野々台は庄内平野と野津原盆地中間の最突端にあって遠く大分平野までの物見台でもあった。箆の台は野々台に最も近く、参動交代のとき殿様のお箆を握っていた場所と伝えられているが、野々台の庄屋波多野家とは姻籍関係にあって、物見役兼ノロシ（大砲）役を兼ねた一種の警備隊の役割りをもっていたらしい。

八 まとめ

さきに、私は日羅伝説の発生を、

① 聖徳太子説話の中に太子の師として再生

② 肥後地方では古墳時代に続く古代寺院の開基者

③ 磨崖石仏の製作者

という三つのタイプに分類した。聖徳太子説話についてはすでに充分意を尽したと思うので、本章では、まとめとして②③についてふれてみたい。

熊本県地方には、日羅創建と伝える肥後七ヶ寺と百済来観音堂があるが、古代芦北の国の中では秘境に位置すると共に、一方では玖磨川の船便の開けた後者の百済来村については、すでに日羅公伝の著者矢野盛経氏が、多くの例証をあげて、百済からの渡来人の築いた朝鮮式山城の跡、つまり「百済城」であり、日羅暗殺後に子孫や従者が移り住んだ地であろうと論破されている。ここを訪ずれその風物に接した者は、容易にその説を信ずることができるであろう。近くの今泉製鉄遺跡や銅山の存在も古来からの製鋳技術の下敷きがあってからこそであろう。

次の肥後七ヶ所の伝日羅創建古代寺院を分拆すると、二つのタイプに分けることができる。その一は、龜峰山興禪寺（八代）、飯田山常楽寺（上益城）、小峰山日輪寺（山鹿）華簇寺（玉名）の四ヶ寺で、何れも平野部の東方に円錐状の美しい山容をみせる神奈備型の霊山の山麓、または山上にある。興禪寺は八代郡寺の跡で日羅作と伝える毘沙門天立像（国重文・クス

一木造・平安初期)があり、飯田山常楽寺は山岳道場で古代、中世の法師集団の霊場であったという。山中に伝日羅の墓がある。日輪寺、華篋寺も日羅の遺跡、遺物があって山鹿盆地、玉名平野の霊山である。

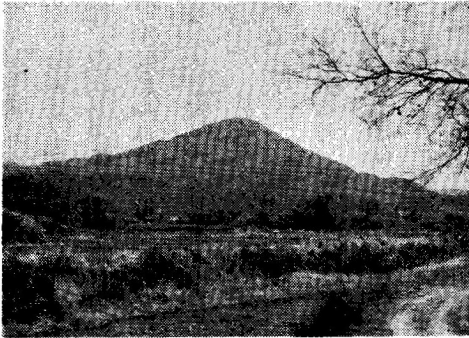
次のタイプは、平野部に存在し、何れも古代火(肥)の北漸と共に移った国府跡に近い位置という特徴をもっている。南から慈眼院(下益城)、寿福山常楽寺(熊本)、日羅山一乗院橋田寺(合志)で何れも天台宗に属していた。それぞれ日羅作仏を伝承し、熊本市龍田の常楽寺には、豊後の志賀氏とのかかわりがあったと寺伝に記録されている。

古代火(肥)の国の発祥については、森田誠一氏の『熊本県の歴史』(山川出版社)によると、古墳の分布からみて、ヒ、は八代郡宮原町氷川流域とし、アシキタはいまの芦北郡よりはるかに北方、八代市の南方から日奈久あたり、つまり玖磨川をはさんで南と北が、「ヒのクニ」と、「アシキタのクニ」であった。というのが定説だとしていることはすでに述べた。この一帯は、八代・有明海方面の海上交通により古くから大陸との交渉をもちながら、一方では大和政権に協力してきたが、磐井の反乱後、北漸してほぼ熊本県全県に勢力をのびし、さらに当時の外国船の泊地であった志摩(福岡県糸島郡)や松浦(長崎県松浦郡)方面にまで進出、今日の肥前・肥後の基礎をつくった。(井上辰雄『火の国』)という。なお、森田氏は古い時代の交通路は今の肥前から海路天草をへて肥後へ渡り、さらに大和との交通は筑後・筑前を通らず、豊後から海上を瀬戸内海に渡ったであろうと指摘されているが、これは前号の私の見解と一致する。この六、七、八世紀の間に古墳時代から仏教時代に移行するが、古代肥の国の北方への勢力伸長の過程に、後に日羅開基と伝える古代寺院の素地ができたと思われる。従来の学者の見解では、日羅が百済の僧に変身するのは八世紀とされているが、熊本県下での日羅信仰(伝説)の発生は、すでに述べてきたような諸史料からみて、私は先駆の古代寺院が平安期に天台宗として再興された時と考えているのである。

さて、大分県大野川流域には古くからの大和への連絡ルートを経て、大和から、あるいは肥後から東西の仏教文化が流入していたことが想像される。とくに九州唯一の「大和」であり、直接大陸と接していた古代文化、経済の先進地であった肥後の影響は無視することはできぬとと思っている。大野川流域や、大分平野、臼杵地方での古代寺院であった大恩寺、連城寺、満月

寺、岩屋寺等の創建時期は私ごときに云々するすべも無いが、少くとも平安期の大神良臣の時代には何等かの素地はでき上っていたと思われる。現在は真言宗でありながら、日吉、山王を祀るこれらの古代寺院は、伝日羅創建肥後七ヶ寺と同様天台文化を下敷きとしているのである。

ところで、ここらでぼつぼつ結論を出そう。平安期までさかのぼる磨崖石仏や古代寺院は、すでに平安中末期に九州を代表する軍事集団にまで発展した大神惟基以下古代大神一族の強大な経済力によって開基、維持、経営されてきたであろうが、その陰には、古代日輪寺や飯田山常楽寺の法師集団の働きを見逃すわけにはいかない。日羅が招来し、百済来村を根拠地とした百済系の技術集団の後裔者たちは、これら古代寺院に拠って、玖磨川、緑川、永川、白川、菊地川など各河川をさかのぼり、高千穂や、奥豊後に入りこみ、採鉱、石工、建築等の広い分野で活躍し、古代豪族や古代武士団発展の協力者となったのである。



飯田山遠望

う。中でも日羅の墓守りを自称する益城ましきの山上寺院飯田山常楽寺は、古代から中世、近世にかけて、数百の僧徒・修験者を養い、山麓には甲佐こうさ、祇用ともち、種山たねやま等良質の石材と石工集団を擁して山岳地帯に鉱山技術者、石工集団の指導者として活躍したと思われる。百済来村久多良木が武將、政治家日羅のふるさとなら、飯田山は変身した百済の僧、あるいは肥後の僧日羅上人のふるさとであり、その足跡、活躍の跡は、豊後のみならず、遠く日向、薩摩にまで及んでいるのである。なお大野川流域の石仏造蹟については平安期のものは古代大神氏、鎌倉期以降は志賀氏など大友諸氏にこれら法師集団（技術集団）が参画したものと見ている。日羅信仰（伝説）は遠く大和で、聖徳太子信仰に付随して発祥し、ふるさと肥後で再生、そしてわが豊後では僧徒集団、技術集団のカリスマ的存在として花開いた。彼が豊後では、多くの場合、「百済の僧日羅」より、「肥後の僧日羅」として活躍の伝承を残しているのはこの間のいきさつを物語っている。

中野幡能氏の所説は、「日羅」は宇佐大神氏が豊後に進出して、「仁聞」に対抗して創設したというものだが、以上のようないきさつ、また日羅信仰（伝説）の広がりからみて、どうしてもこの説には納得できかねる。日羅の存在は、大神惟基と同様、もつと奥深く、しかも幅広いものである。

次回は「日羅」に引続き、「炭焼小五郎と真名野長者」を私なりに民俗学の立場から検討を加え、宇佐大神氏とは無縁の説話、伝説であることを証拠つけてみたい。

―追記―

本稿脱稿後、私は聖徳太子信仰に関する次の二著を入手、精読する機会を得た。

『聖徳太子信仰の成立』田中嗣人著、吉川弘文館

『聖徳太子』坂本太郎著、吉川弘文館

前者は聖徳太子信仰の発生を天武天皇（七世紀後半）とする所論であるが、この中には日羅のことはふれられていなかった。後者坂本太郎氏の太子論に二ヶ所参考になる部分があるので、次に摘出して参考に供したい。

○二二六P、救世観音の化身

「平安時代になると、太子は救世観音の化身とされる。『伝暦』敏達天皇十二年の条、百済の賢者達率日羅は、召されて日本に来るが、太子に向って地に跪き、合掌して「敬礼救世観音、伝燈東方衆散王」と讃えたが、人はそれを聞くことができなかつた。」

○二二一P、工匠仲間の太子信仰

「民衆の信仰といえば、工匠の人たち具体的には大工・左官・鍛冶屋などが、太子を信仰し、太子講を組織して太子の祭りをするのは、室町時代の末から始まったのであろう。民俗学者がタイシコウは、十一月二十三日の夜から二十四日にかけて

て行われる行事で、冬至に当って一陽来復の春を信じて、新たな神の子即ちオホイコ（太子）を迎え祭ろうとしたのが起原であるという（『民俗学辞典』）。しかし、工匠たちの行う太子講はやはり歴史上の人物としての聖徳太子の信仰にもとづくものであろう。そして、それは『伝暦』から得た知識がもとになっているのであろう。

『伝暦』には、いわゆる太子の四節文の第一として、天皇並びに代々の天皇のために七ヶ寺を営み造らうという誓願を述べており、二十七年の条、太子が勅を奉じて畿内諸国臣連国造伴造の建てる所の寺地を巡検して、地なき者には地を給い、木なき者には木を給い、壙なき者には園を給い、二十カ日を経て終に蜂岡に至り、塔の心柱を建つという造寺についての、きびきびとした采配や、二十六年の条、生前科長に墓を作らせ、墓内を見て、ここを断れ、かしこを切れと墓工に命ずると毅然とした態度などを記している。これが一般に流布し敷衍されて、太子を建築・土木についての先覚者とする観念を生じたものであろうと思う。今も関東各地の寺院や神社の境内に、工匠連中の建てた、「聖徳皇太子」と題した大きな碑石を見ることが出来る。」

この太子信仰が、もっと早く平安、鎌倉、室町の時代に、肥後、豊後の地では、天台僧徒や修験者、技術集団の手で「日羅」におきかえられて、カリスマの信仰対象、あるいは技術者とされるようになったのではなからうか。検討を要する問題であらう。

（ ）
・鶴見山寺）

お知らせ

本誌の表紙上部右端に記した ISSN 0287-6809 の番号は「国際標準逐次刊行物番号」です。これは逐次刊行物に付号される国際的なコード番号で、以後この番号によって図書館などで本誌の識別や検索が行なえるようになります。